黒ウサギ隊の５人組（仮）

田中太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒ウサギ隊の５人組（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１００７Ｚ

【作者名】
田中太郎

【あらすじ】
ドイツ軍には、特別技術課という部署があった。
その部署の人間は、とにかく変わり者で
男ながら、ＩＳを動かせる男まで存在する始末だ。
そんな彼らが、ＩＳの物語を引っかき回す。

プロローグ（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします。

全２００話を予定しています。

長丁場ですね。

プロローグ

ＩＳ――インフィニットストラトスの登場によって世界は変わった。
女尊男卑の世界に変わった。
何故なら、ＩＳは基本的に女性にしか反応しないからだ。
そして、その女尊男卑は軍隊にまで及んでいった。

ある日のドイツ軍基地…

金髪の男性がため息をつきながら歩いていた。

「…ハァ……」

そして、特別技術課と書かれたプレートのあるところへ入る。
中には、４人ほどの人が居た。

「皆、聞いてくれ。」

金髪の男性は、その金髪を掻き上げ言うと４人は、金髪の男に注意を向けた。

「今日の新パーツ、次世代型ミサイル試作機ｖｅｒ２．５のテストは中止になった。
（くそ、最近こればっかだ…）」

金髪の男も落胆しているように、他の４人も目に見えるように落胆している。

「またですか～？これで１３８回目ですよ～？」

語尾を伸ばして喋る長い黒髪に黒メガネの青年は、バルト。

「また、ＩＳっすか？うざいっすね、ＩＳ！」

部活等の後輩の様な喋り方をし、短髪の男はカーター。

「……（，・ω・、）」

無言の彼は、ジャン、ニット帽をかぶっており、一度も外したところ見た事がないそうだ。ちなみ、ＦＰＳをすると人が変わるらしい…

「それで？一応理由を聞きましょう。」

茶髪に眼鏡で丁寧な口調のおっさん（今年３５歳）はアロン。似非紳士だ。

「カーターの言うとおり、ＩＳの模擬戦をやるからそこどけ！…だそうだ…」

そして、この金髪の男はアルフレッド、通称アル、ちなみにここのリーダーである。

「やっぱりですか…」

アロンは、少しだけ残念な顔をする。

そして、部屋の空気が重くなる。

するとアルが…

「ま、こういう時は…呑みますか！」

そう言って、どこからかウイスキーと人数分のグラスを出す。

「おお！太っ腹っすね！いつもは、安いカップ酒なのに…」

カーターは、嬉々として、そのグラスを受け取り、ウイスキーが注がれると思いっきり破顔する。

「……（＾Ｏ＾）／」

ジャンは、声には出さないがうれしそうな顔をしている。

「いいのですか？勤務中ですよ？」

アロンは、そんな真面目な事を言っているがしっかりとグラスを持っている。

「細かい事は、気にするなですよ～～」

にこにこしながら職務放棄宣言する、バルト。

そして、全員にウイスキーが渡った。

「それでは、か―――『ちょっと待って下さい。』……なんだよ？」

アルが乾杯しようとすると、アロンによって遮られる。

「そういえば、今日、なんか初めて男がＩＳを動かしたそうですよ。」

アロンは、メガネを押し上げる。

「おお！そいつは、すごいな！ドイツからもでないかな？」

「そうです。それを確かめるために、とりあえず今ドイツ軍では、ＩＳを
各部隊ごとに回しているんです。ちょうど家に回ってきているのですが、
私たちは、全員試しましたので後は、アルだけです。」

アロンが長々と説明をしていると、カーターがＩＳを何故か、かついでくる。

「ふ～ん…（あいつらは、ダメだったのか…）それじゃ、試してみるか！」

アルがＩＳに触れるとキィンと、甲高い音を上げて、起動する。

「……！と、とりあえず、上に報告を…」

「そ、そうっすね。」

「……（＋＿＋）」

「さ、さすが～」

「……ｍｊｋ」

いち早く石化の解けたアロンが上に電話をかけるが、他の人たちは、皆動揺している。
そして、当人であるアルは…

「……（ゑ？俺、どうなんの？）」

泣いていた。

アロンが、上の人に電話をして数分後、上の人３人があわただしく駆けこんできた。
もちろん、ウイスキーは処分済みだ。胃の中に…

「……（酒臭い…）んん！」

「「「「「ビクッ！（バレタ！？）」」」」」

「？…アルフレッド＝バウムガルト少尉」

高級軍人の一人がアルのフルネームと階級を言う。

「は、はい！」

緊張したアルは、声が裏返っている。

「……貴官は、本当にＩＳを起動できるのか？」

さっきとは違う高級軍人がアルに疑問を抱く。

「出来ます。」

「では、実演したまえ。」

ちょび髭が似合う高級軍人が、偉そうに命令する。

実際に偉いのだから当たり前と言えば当たり前だが。

「はい（なんで、こいつらこんなに息あってるの？）」

嫌な顔一つせず、ＩＳの起動を始める。

キィイン、先ほどと同じ様に起動する。

「おぉ！我がドイツでも…！」

高級軍人が感嘆の声を漏らす。

「……よし！それでは、貴官には本日付で黒ウサギ隊（シュバルツェア・ハーゼ）に異動を命ずる！」

ちょび髭の高級軍人がまたもや、偉そうに命令する。

「はい…」

アルは、この特別技術課には特別な思い入れがあり、
今さらの異動は、かなり堪えるようだ。

その後、アルは二階級特進し、大尉となり
黒ウサギ隊に異動していった。

特別技術課のメンバーは…

「行ってしまいましたね。」

「そうっすね。」

「……（T＿T）」

「なんか、寂しいですね～」

感傷に浸っていたら…
ひょこっと、高級軍人が顔を出している。

「……／（◎ｏ◎）／！」

それに気付いたジャンが驚きのあまり、座っていた椅子から転がり落ちた。

「ジャン！どうしたんっすか？」

カーターが、ジャンを起こすとジャンは、高級軍人の方を指さす。

「？うお！！びっくりしたっす。」

「…無礼だね、君たちは…」

高級軍人の額には、青筋が出ている。

「申し訳ありません。

似非紳士が謝るが、依然として高級軍人の額の青筋は消えない。

「まあ、いいだろう。

君達４人もバウムガルト大尉と共に、黒ウサギ隊に異動だ。

大尉の強力な脅ｈ――推しによって君たちの異動が決まった。」

高級軍人は説明するにつれて、どんどん顔が青くなって行くことから

アルが、どんな脅迫したかを考えると身震いする。

「そういうことだから、今日中に異動しとくように、では。」

そう言い残し、去っていく高級軍人。

「「「「……」」」」

そして、４人は無言のまま荷物をまとめて黒ウサギ隊に向かった。

４人は、確かに感じていた、次の日は波乱の一日になると…

プロローグ（後書き）

感想待っています。

タイトルは、仮なので良いのがあったら教えてください。

次は、専用機が公開されると思います。

第1話～ク、ク、クラリッサ（ドリランドのＣＭ風に）～（前書き）

タイトルは、気にしない方向で…

専用機公開は、次回で…

第1話～ク、ク、クラリッサ（ドリランドのCM風に）～

アルが、黒ウサギ隊の部屋の前に立ち、ドアをノックし、名前を告げると
中から黒ウサギ隊の一人だと思われる眼帯を付けた隊員が出迎えて、副隊長の所に案内すると言い出す。

「あなたが、アルフレッド＝バウムガルト大尉ですか？」

「はい。そうです。（皆、眼帯付けてんな～、俺も付けるのかな…？）」

アルは、興味深そうにその眼帯を眺めている。
だが、それは見られる側からすると、ずっと見つめられている様な気分になる。

「…では、こちらへ（な、何？何で、ずっとこっち見てるの？）」

「（ま、いいや。）」

そして、目を離す。

「…（何なの？ホントに…）」

見てただけで、過剰反応ではないか？と思うかもしれないが、
ずっと女子しかいない環境にいたのだ、多少は、仕方ないというものだ。

そうこうしている内に、副隊長の居るという部屋に着いた。

「…こちらでお待ちしています。では、これで。（はぁ…何か疲れた…）」

「はいはーい♪」

そんな隊員Ａの気持なんぞ、露知らずアルは、飄々としている。

「（副隊長か…ファーストコンタクトは、大事だからな…よし！）」

今さっき、最悪のファーストコンタクトを取ったことに全く気付くことなく

意気込みながら、応接室と書かれた部屋のドアをノックしようとすると…

ガチャ、ドアがアルの方に開いた。

「ヘブッ！」

ドアにはじかれ、地面にヘッドスライディングする。

「おや？これは、失敬。遅いので、迎えに行こうとしたのだが…来ていたか。」

中から出てきたのは、アルのタイプ、ドストライクのクラリッサだった。

「！！（やばいぞ！、これは、やばい…タイプだ…）」

「？どうした？」

アルの熱烈な視線に気づき、手を差し出す。

「あ、どうも。」

手を取る。

「（あ、手すべすべだ。）」

起き上がると、当然手を離される。

「ぁ…」

「？…（何だ？何で悲しそうな顔をするんだ？そういえば、こないだ読んだ漫画と展開が似ているな…）大丈夫か？」

「え、ええ！大丈夫です。申し遅れました。アルフレッド＝バウムガルト小i――じゃなかった、大尉です。」

今さらながらに、挨拶をする。

「ああ、クラリッサ＝ハルフォーフ大尉だ。同じ大尉だな、よろしく頼む。」

そう言って、握手するために手を差し出す。

「はい。」

アルは、その手を握った。
真面目な顔で
「（うは！手奇麗だな！）」
いや、違った。ポーカーフェイスだった。
「今、隊長は不在だからな、私があいさつをした。
それでは、早速で悪いが…専用機についてだが…
武装については、自分で作るという事でいいのだな？」
「はい、構いません、むしろそうして下さい。」
「了解だ、では、明日の朝に格納庫にへ来てくれ、その時にＩＳを渡す、では。」
クラリッサは、足早に立ち去って行く。
アルは、その後ろ姿を見ながら、ニヤケ…微笑んでいたら
「あ～アルさんだ～」
後ろから、バルトの声がする。
「……（＾＾）／～～～」
「おや、こんなところで何をしているんです？」
「なんか、ニヤけてないっすか？」

どうやら、特別技術課の面々が来たようだ。

「やっと、来たか！実はな…あ、やっぱ、何もない。」

歯切れの悪さに、疑問符を浮かべる４人。

「どうしたんっすか？」

「らしくないですね？」

「……（・・・；）」

「何があった～？」

「いや、何も、それよりさ、明日ＩＳのコアが一つ回ってくるぞ。」

ここで、アルから爆弾が投下される。

「ホントっすか？」

「じゃあ、溜まりに溜まったミサイルのテストが…」

「＼（＾ｏ＾）／」

「これで、年が越せるってものですね。」

「ああ、年が越せるかどうかは、知らんが、

ＩＳのテストと偽ってミサイルのテストが出来るのは確かだな。」

アル達は、ミサイル、ミサイル言っている。

そして、その後、第４５８回ミサイル談義が始まり、オールナイトした５人だった。

第1話～ク、ク、クラリッサ（ドリランドのＣＭ風に）～（後書き）

気付いたでしょうか？
作者は、ミサイルが大好きです！

だから、専用機は…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1007z/

黒ウサギ隊の５人組（仮）

2011年12月4日22時56分発行